

44

世界文学全集

うずしお	シュトルム／国松孝二訳
トニオ・クレーゲル	トーマス・マン／高橋義孝訳
マルテの手記	リルケ／大山定一訳
ルーマニア日記	カロッサ／高橋義孝訳
変身	カフカ／高橋義孝訳

世界文学全集 44

うずしお／トニオ・クレーゲル／マルテの手記／

ルーマニア日記／変身

シュトルム／マン／リルケ／カロッサ／カフカ

訳者 国松孝二／高橋義孝／大山定一

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

うずしお	3
トニオ・クレーゲル	69
マルテの手記	139
ルーマニア日記	349
変身	457
人と作品	517

う
ず
し
お

Carsten Curator

by

Theodor Storm

本名はカルステン・カルステンスといって、さる小商人の息子で、波止場の「トゥヴィーテ小路」にもう祖父の代にたてられた家と、それから、あたりの島々の船頭たちが海に出るときいつも使う、衣類やメリヤス類のあきないのを、父親からゆずりうけていた。けれども、すこし理屈っぽい気性で、とかく北フリースラント人に見られるように、生まれつき頭の仕事が好きだったので、幼いころから、いろいろな書物や著作に読みふけり、しだいに仲間のあいだでは、疑問のおこった場合には、あいつにたしかな知恵をかりるがよい、という評判をたてられた。どうかするとありがちなことだったが、乱読にわざわいされて、まわりの者がついてこれられないような道に、自分の考えが足を踏み入れたときには、無論彼はだれにもそれをすすめなかった。従ってまた、そのために、だれの不信を招くこともなかった。こんなわけで、彼は数多くの未亡人や独身の女たちの後見人になった。そうした女たち

は、まだ当時のおきてでは、すべて法律事件の際には、こうした介添えが必要だったのである。

彼は他人のことを面倒みてやっても、自分の利益が目当てではなく、仕事そのものの面白さにひかれていたのであるから、平素こうした事柄の処理をなりわいとしていた人たちとは、根からちがっていた。やがては、臨終の人たちもこどもらの後見人として、裁判所も破産財団や遺産額の管理者として、「トゥヴィーテ小路」のカルステン・カルステンスを、いちばんの適任者とみとめるようになり、いまでは「後見人のカルステン」と呼ばれて、清廉の士としてひろく聞こえていた。

こんなふうに機密職務が多忙で、時間をとられたので、無論小さな商売のほうは副業になりさがり、結婚をせずにいっしょに両親の家にいのこっていた妹の手ひとつで、ほとんど切りまわされていた。

ともあれ、カルステンは口数のすくない果斷な人物で、相手のいやしい気持ちを感じたときには、自分が損をしても仮借するところがなかった。いつだったか、長年彼から草地を一カ所、そのころの事情からすれば、安い地代で借りていた、いわゆる「牛の草刈り

人」が、こういう値段では今年はやってゆけないと、いろいろ文句をならべて言いはったすえ、聞きいれられないとわかると、けっきょく以前の借地代に同意したが、今度はこの申し出もはねつけられると、もっと高い借地代にまで同意したことがあったが、このときなどカルステンは、自分のところの草地で、ひとさまに思わぬ損をかけるのは、けっして自分の本意ではないと言いはなち、やがて、前々からこの土地をほしがっていた町のひとに、もとの値段でゆずってしまった。

それでも生涯しやうがいには、さすがの彼もひとに首をかしげられた時期もあった。といって、依頼された事柄を仕こなったというわけではなく、自分自身の処置が、どうかと思われたのである。しかし、よくひとの死ぬことのある機会に、死に見舞われてから、二、三年たつと、すべてがもとどおり片がついてしまった。——それは大陸封鎖のころ、つまりこの土地でいう封鎖時代のころで、小さな港町がデンマルクの士官やフランスの船員、また一方ではいろいろな他国者の思惑師でいっぱいだったとき、そうした思惑師のひとりが、自分の家の屋根裏で、首をくくっているのが発見され

た。これが自殺であることは疑いを入れなかった。というのは、うちつづく損失で、死んだ男は動きのとれない状態に陥っていたのだった。世間の噂うわさでは、あとに残した唯一の資産は、娘のうつくしいユリアーネで、いままでのところ、見にくる人はたくさんいたが、まだ買い手がつかないということだった。

あくる朝になると、もうカルstenはユリアーネから、後始末をつけてもらいたいという依頼をうけた。しかし、彼はこの頼みをすげなくはねつけた。「わたしは、ああいう連中と、かかりあいになりたくない」それでも、この頼みをもってきた波止場人夫の老人が、午後またやってきて、「むづかしいことを言いなさんな、カルsten。残っているのはあの子ひとりで、自殺するって泣き叫んでいますぜ」と話すと、彼はすばやく立ちあがって、ステッキを手にとり、使いのあとについて、死の家におもむいた。

使いに案内されてはいった部屋へやの中央には、遺骸いがいをいれた柩ひつぎが、蓋たをあけたままおいてあった。そのわきには、きれいな女の子が肌着はだぎのまま、ひくく床しょうの上うへに両膝ひざをあげてすわっていた。鼈甲べっこう製の梳櫛くしを手にもち、ほどけて背中にたれている、ふさふさとした金髪

を、その櫛で梳^すいていた。でも目は充血し、唇^{くちびる}をふるわせて、激しく泣いていた。途方にくれたためなのか、父親のことが悲しいためなのか、そのところはど
うもはつきりしなかった。

カルステンが歩みよると、立ちあがって、非難をあびせた。「見殺しにするつもりなの？」と、彼女は叫んだ。「なんにもわからないこのわたしを。どうしろって言うの？ おとうさんはたくさんお金を持ってた。でも、きつともう一文も残ってやしない！ そこにそうしておとうさんは死んでいるけど、わたしにも
そうなれって言うの？」

彼女は、ふたたび床几に腰をおろした。カルステン
はちょっと驚いて、彼女を見まもった。「とんでもない、ユリアーネ」と、やがて彼は口をひらいた。「お
うかがいしたのは、実は、お手伝いをするつもりだったんだ。おとうさんの帳簿を見せてくれませんか？」
「帳簿？ 知らない。でも、さがしてみるわ」彼女は
隣の部屋に行った。それから鍵束^{かぎくわ}を持って、またもど
ってきた。「はい」と言いながら、彼女はカルステンの
前の机の上に鍵束をのせた。「あなたはいい人だっ
て聞いています。好きなようにしてください。わたし

もうかまわないから」

こう投げやりな言葉を口にしたとき、いかにもそれ
がよく彼女に似合ったのに、カルステンはおどろきの
目を見はった。彼女の全身がほっと息づき、急に日が
さしたように、微笑がうつくしい顔にみなぎったのだ
った。

彼女の言ったとおりになった。カルステンが仕事
をし、彼女はなにもかまわなかった。いったいなにし
て暇をつぶしているのか、カルステンには皆目わから
なかった。しかし、みずみずしい紅い唇は、ふたたび
笑いはじめ、黒い喪服は蠱惑^{こくわく}的な身のかざりとなっ
た。いつだったか、ため息をついているのを聞いて、
心配事があるのかどうか、あるなら言ってみなさい
と、彼がたずねたことがあった。彼女は微笑をふく
んで、彼を見まもった。「あ、あ、カルステン」と言っ
て、もう一度ため息をついた。「とても退屈だわ、黒
服のおかげで、まるつきりダンスができないなんて！」
それから、まるでこどもが遊びたがるように、あなた
どう思います、せめて一晩だけでも、いつか喪服を替
えることできないかしら、おとうさんはいつでもダン
スをさせてくれたし、それに、いまはもうとうにお墓

にはいつてしまっているんだからと、カルステンにたずねた。

それでも彼が承知しないと、つんとして立ち去った。これが、厳格な彼にたいする、いちばんよい仕返しだということを、彼女はとうに気がついていていた。というのは、彼の骨折りで、亡父の財政の乱れも片がつき、どうやら差しひき帳消しになりそうなどころまで漕ぎつけたが、今度は彼自身が、心を取り乱してしまつたのだった。つまり、うつくしいユリアーネの笑みをたたえた目が、四十男の心を虜にしてしまつたのだ。従来ならばきつと呆れかえるようなことも、日常の平静な歩みがすっかり押しのけられてしまつたこのごろでは、たいして気にもならなかつた。それに一方では仕事をしつけないユリアーネが、ひとり身でこれから先いろいろ苦勞をするより、安全な避難所をもとめたので、妹のブリギッテが頭をふつたにもかかわらず、不釣り合いなこの二人のあいだには、急速に夫婦のちぎりが結ばれるようになった。無論ブリギッテは、このために仕事の負担が二重にかさむだけで、いまでは、家政上いよいよかけ替えのない人になってくればかりだった。カルステンのほうは、こんな若さと

美しきとにあふれた妻を、不意に手に入れるなんて、自分の風采からいっても、年齢からいっても、望めそうもないと思つていたので、あふれるような感謝の念にいっぱいになり、若い妻の望みは、見さかいもなくなえてやった。こうして、従来はひどく控え目なカルステンが、やがて、ユリアーネのありあまる暇な時間をつぶすために、町にゆかりのない他国の士官たちが幹旋している会合には、いつも姿をみせるようになった。こうした社交は、彼の身分や財産に不相応であつたばかりではなかつた。ただ妻のためのつきあいなので、出席しても、彼自身は手持ち無沙汰な除け者の役割を演じていた。

ところが、最初のお産でユリアーネが亡くなつた。

——「また踊れるようになりたい！」と、妊娠中いくども口ぐせに言つていた。しかし、二度と踊れるようにはならなかつた。おかげで、カルステンは危険をまぬがれた。と同時に無論幸福も失つた。おそろくだれのものにもなれないような彼女のことで、ほとんど彼のものにもならなかつたし、それに、いろいろ非難もありはしたけれども、彼のふだんの生活のなかに、美の光をなげこんでくれた彼女だった。いわば、見も

知らぬ蝶が庭の上をかすめ去り、もうとうに見えなくなつてしまつてからも、なおもじつとあとを見送つてゐるような気持ちだつた。ともかく、カルステンはもとどおり、いや以前よりいっそう、分別のある慎重な人に立ちかへつた。亡くなつたユリアーネの残してゐた男の子は、間もなく顔形が、やがて性質までが、うつくしい母親そっくりになつたが、カルステンは心を鬼にして、この子をきびしく育てあげた。氣だてのよい、しかし、とかく誘惑されやすい愛児に、適当な折檻を惜しまなかつた。それでも、そうした場合にはいつもすることだつたが、一種途方にくれたような驚きを浮かべながら、うつくしいこどもの目で見上げられると、さすがに父の情として、すぐまた熱烈な愛情をこめて、わが子を胸に抱きしめずにはいられない氣がした。

ユリアーネが亡くなつてから、二十年あまりもたつた。ハインリッヒ——という祖父の名がその子の名だつた——は学校にあり、学校を卒業して商家へ奉公に出た。しかしもつて生まれた氣性は、これといつて変わらなかつた。器用な質で、なにをしてもやすやす

とやつてのけたが、かつての母親同様、うすい蔭色の巻き毛の頭を仰向けで、笑いながら、「やっちまえ！ かまうもんか！」と、仲間になにをかける様子で、しつくり生地にはまっていた。実際、彼がいつも良心的に約束をまもつたのは、この点だけだつた。彼はなにかまわなかつた。でないまでも、かまわないほうがよかつたようなことにばかりかまつた。叔母のブリギッテは、たびたび泣かされた。カルステンも、晩、壁ベツドの櫓の上に横になつて、どうしてなのかわからなかつたが、なにやら氣になつて眠れなかつた。起きあがつて考えてみると、息子の姿が目先にちらつてきた。そして、大きくなつてゆくのをみるのが、不安なような氣がしてきた。

しかし、家のこどもはハインリッヒばかりではなかつた。——カルステンとたがい氣が合つて懇意にしていた遠い親戚の者が、八つになる女の子をのこして急に亡くなつた。その子は、生まれたときにはもう母親を亡くしていたので、故人の望みにより、カルステンは小さなアンナーの後見人となつたばかりでなく、自分の家にひきとつて、なにくれとなく面倒をみてやつた。しかし、とくに彼は、その当時は危険が起こり

やすかったのに、亡友の娘の身元をひきうけ、前貸しをしてちょっとした土地を買ひもとめてやり、その後時勢がよくなつてから、高い値段で売りはらうことができるようにしてやって、亡友にたいする誠意を示した。

アンナーは、一つ年上のハインリッヒとは、ちがつた母親の氣質を受けついでいた。ハインリッヒのほうは、どんなにその氣になつても、行動する場合に、自分自身の幸不幸ばかりか、ごく近い人たちの幸不幸だけでも、考慮に入れることができなかった。これに反してアンナーのほうは——叔母ブリギッテがポケットに手を入れて、償いに三ペニツヒ銅貨を一枚あたえ、それから、はげしく接吻してやることがたびたびあった。「馬鹿だね、こんなことだろうと思つていたら、またいいようにされて！」しかし、ブリギッテは、兄のカルステンに声をかける機会があると、よくこんなことを言った。「従兄弟のマルティーンは實際親切ものだこと、いい子宝をのこしていつてくれて」

非常に氣だてはやさしかったけれども、アンナーは快活なしっかりした氣性の子だった。カルステンはと

きおり心配して、ハインリッヒのことをたずねても、ブリギッテから、「アンナーのところにいますよ。船の帆を縫ってもらうんだって」とか、「アンナーにかまつて、桜用の鳥除け網をつくろうのを、手伝っています」とかいう返事を得ると、うなずいて、安心して仕事にとりかかった。——この物語が改めてつづけられる当時の、ある晩夏の午前、アンナーはちょうど成年になり、すっかり發育したブロンドの乙女として、髪の白くなつたカルステンとともに、町役場の町長のまえに出頭して、成年になつたための必要な手続きを、すませようとするところだった。

「叔父さん」と、彼女は法廷にはいるまえに言った。「こわいわ」

——「おまえが、アンナー？ おまえらしくもない」「だって、叔父さん。立派なところでしょー！」

法廷にはすっかりなじみの、やせた年よりのカルステンは、頬を上氣させて自分を見上げてゐる、みずみずしい少女の顔を、にこにこしながらながめ、それから、法廷の戸口を押しひらいた。

町長は案に相違して、きさくな老人だった。「よいお子さんだ」と、町長は好ましうに彼女を見つめな

がら言った。「あんたも存じやろうが、あんたはそのうちまた未成年にならなくちゃならない。といつても無論、あんたが金の指輪を指にはめてもらうときじゃ！ その節は、カルステンさんのような頼みになる人の手に、一生をゆだねてもらいたいものだね！」

町長はカルステンのほうに、心からなる一瞥を投げた。アンナーは可憐な顔をかすかに紅くそめたが、こうして自分の後見人の賞められるのを聞いて、かたくりしい気持ちは、すっかり消えうせてしまった。落ちついて、自分の財産の高を見せてもらい、乞われるまに、注意ぶかく慎重に、ひとわたり目をとおした。しかし、それから、まるで息苦しくなったように言った。「八千ターレル！ だめ、叔父さん、だめだわ！」

——「なにがだめなんだい、アンナー？」と、カルステンはずねた。

「それよ、叔父さん、そこにあるたぐさんのターレル——そう言って、彼女はカルステンのまえに、わかかしい全身をおこした——「もらったって、どうしようがあります。使いみち、教えていただかなかったんですもの。だめですわ、町長さま、すみませんけど、あたし今日はまだ、成年になるわけにはまいりま

せん」

すると、二人の老人は笑って、そんなことを言っていたしようがない、成年になったんだから、いまのところは、やはり成年になっていなくちゃならないと、さとした。そして、カルステンは言った。「安心おし、アンナー、わたしが後見になってあげよう。町長さんに、ぜひわたしを後見人にしてくださるように、お願いしてごらん」

「後見人、叔父さん？ あたし、みんなが叔父さんのことをそう呼んでるの、よく知ってるわ」

「うん、アンナー。でも、今度はこうなんだ。おまえは、わたしとわたしの年とった妹の、体と心の面倒をみてくれ、わたしは、いままでもおりおまえを助けて、厄介なターレルを保管してやる。それなら、なにも申し分ないじゃないか」

「アーメン」と、老町長は言った。それから、アンナーはきれいに署名して、自分の財産が、ただしく保管されてきたことを裏書きした。

やがて、彼女とカルステンとが暇を乞うと、町長は仕事が終わってほっとしたように、ちらりと表をながめた。

「困ったわい！」と、町長は叫んだ。「ブローカーのヤスペルスだ！あの碌でなしめ、またなにか文句を言いにきたのだろう！」

カルステンは微笑して、思わず養女の手をつかんだ。

二人が部屋を出て、階下に通ずる大階段を下りかけると、すりきれた茶の上着をきた、小づくりの年よりじみた男が、その階段をあがってきた。踊り場のところにつくと、その男は息をきらして、細いステッキに身をもたせ、小さな灰色の目で、下りてくる二人を見あげながら、高いシルクハットを、二、三度、狐色の髪からちよつとはずした。

カルstenは、簡単に「こんにちは」と言つて、通るすぎようとした。ところが、相手は二人のまえにステッキを突きつけた。「おっと、待ったり！」——小さな皺くちやの顔をして、怒鳴つたその声は、老婆の声そっくりだった——「このままだ通さんぞ！」

「町長さんが、おまえさんをお待ちかねだ」と言つて、カルstenはステッキを押しつけた。

「町長？」ヤスペルスはいかにも愉快そうに笑つた。「待たしておきやいい！今度の相手はおまえさんだ、

カルsten。こちら辺にいるだろうと、察していたんだ」

「わたしが相手だつて、ヤスペルス？」と、カルstenはくりかえした。その声は、いつもの彼にはめずらしく、不安の色をおびていた。もうよほど前から、思ひがけない話を聞かされることにそうだったが、ハインリッヒのことが、念頭をかすめたのだった。ハインリッヒはさきごろから、当地の議員をしている人の店に勤めていた。その人というのは、カルsten自身以前その人の父親のところに奉公して、いっしょに仕込んでもらったことのある人で、厳格な老人だったが、いままでのところは満足して、わかいハインリッヒのことを手きびしく叱つたのは、唯の一度だけだった。それに、ハインリッヒはつい昨日、日曜日に、店主のかわりに商用旅行に出て、帰ってきたばかりだった。馬鹿な、まさかヤスペルスのやつ、ハインリッヒの話をするんじゃないまい。

そのあいだに、ヤスペルスは口をあけたまま、自分よりはずつと大きなカルstenを見あげ、見るからに愉快そうに、相手の顔色の変わるのを見まもっていた。「なんだよ、カルsten」と、やがて彼は声をかけた。

その声の調子は、心の浮きたつほど陽気だった。「おまえさんもご存じだろうけど、だんだん深間ふかまにはいつてくるかもしれない。なにしろ、雀百すずめまで踊り忘れずだ」

「なんの用事なんだい、ヤスペルス！」と、カルステンは陰気に言った。「ここで今すぐ話したら、そのほうが、おまえさんも面倒がなくていいだろう」

しかしヤスペルスは、カルステンの上着の裾すそをつかんで、下にひきよせた。「こんな役場の中で、話せることじゃない」それから、少女のほうに向いてつけ加えた。「アンナーさんは、ひとりで家に帰ったらどうだね」

そうして、いつもなにかつかもうとでもしているように見える、そわそわした手つきで、もう一度シルクハットをとって、忙しそうに、また階段をどしんどしん下へおりて行った。

役場の外に出ると、彼はステッキで横町をさし示した。はずれに自分のすまいがあるのだった。アンナーは物問いたげに、後見人のカルステンを見つめた。しかし、カルステンは黙もくったまま、帰るように手真似をした。そうして、金縛りきんばりになって自由がきかなくなっ

たように、「碌ろくでなし」の後につづいた。やがて、ヤスペルスはカルステンとならんで、その路をせっせと上って行った。

「トゥヴィーテ小路」に沿うた家のうしろの小さな庭には、以前こどもたちが鳥除け網を桜の木のためにつくったことがあるが、その桜の木のほかに、せまい漂白場との境に、大きな梨なしの木が植わっていた。この木は、近所のこどもたちの楽しみであると同時に、一種の家宝であった。というのは、これは現在の所有主であるカルステンの祖父が植え、父親自身が修業の身であった当時、町でもっとも好まれていた幾種類かの梨のうち、種類のちがったものの枝を三本つぎ木したもので、それがいまでは三つとも大きくなって、鬱蒼うっそうと枝をひろげ、そのときどきに、みずみずしい実がたくさんなった。そのうち、井戸竿いどざなでとどく分は、もちろん家の人の口にはいらなかった。でなければ、こどもたちがアンナーのところへ、そううるさく押しかける必要がなかったろう。そういうわけで、東隣の庭のほうから、少女の高笑いが聞こえてくると、隣の人たちは、さっそく、アンナーが木のところで活躍をし、

こどもたちが芝生の上で落ちてくる実をうばいあつて
いることを知った。

役場から帰って、家の中にはいろいろとしたときも、
アンナはそうした近所のやんちゃな子にかじりつか
れた。玄関のうしろの、敷き石をしいた涼しい部屋、
いわゆる「ペーゼル」に、帽子とスカーフをぬぎ捨て
ると、その子を前にかかえて、両腕にまたがらせたま
ま、その部屋から庭に通ずる戸口をぬけて、大きな梨
の木の本陰へ行った。

「ごらん、レーフケちゃん」と、彼女は言った。

「あそこの上に猫がのっている。やっぱり、おいしい
黄色な梨の実がほしいのよ、でも待ってちょうだい、
竿を持ってくるから」

ところが、そう言うてから、庭へ出る勝手口のなか
にある井戸のほうをふりむいたとき、彼女は悲鳴をあ
げて、あやうく、こどもを下に落とすところだった。
ちよっとしたはずみで修理のおくれた、腐った木の井
戸側の上に、幼なじみのハインリッヒが、両足を宙に
ぶらさげたまま腰をかけ、いまにも落ちそうに、頭を
前にのめらせていた。

しかし、彼女は見るより早くそばに駆けより、うし

ろから両腕で彼をだきしめ、うしろにひきよせた。ハ
インリッヒの下にしていた腐った板が、めりめりっと
砕けた。彼女はよろめいて膝をついたが、ハインリッ
ヒは青白い、ほとんど女のように美しい顔を、なおも
彼女の胸にもたせていた。

彼は身動きもしなかった。どんなことが起ころう
と、無気力にそれに身をゆだねているかのようだっ
た。やがて、彼女がとび起きたときも、顔をおこした
だけで、板ぎれの上に横になったまま、彼女を見よう
ともしなかった。

彼女は瑠璃色の目に涙を二、三滴たたえて、すこし
腹立たしそうに、彼を見まもった。

「どうしたの、ハインリッヒ？ なぜこんなに、あた
しをびっくりさせるの？ どうして、議員さんのお店
に行かないの？」

すると、彼は絹のようにしなやかな髪の毛を、額か
らかきのけて、だるそうに彼女をながめた。

「あそこへはもう行かない」と、彼は言った。

「もう行かないって？」

「そうさ。残るところ、道は二つだけだ。この井戸の
中に身を投げるか、牢屋の牢番のご厄介になるか」